

源氏物語に於ける「うし(憂し)」の用法

山 本 ト シ*

(1981年3月20日受理)

はじめに

紫式部日記や紫式部集の夫歿後の歌の中で用いられる「うし」「うき」(以下、一括して「うし」と記す)という言葉の使い方には独特の重みを感じられる。この言葉によって表現される憂愁をもって、紫式部の後半生の精神生活の特徴とする指摘もいくつかある(注1)。しかし、日記や家集では「うし」の使われる状況や人物の心理がよく簡単にしか説明されないため、彼女の「うし」という感情がどのようなものであったか明瞭にはし難い。

やはり夫歿後の執筆と言われる源氏物語では「うし」が210例ほど使われており、これらの使用状況や人物の心理を探ることは、日記や家集の場合ほど難しくない。源氏物語の「うし」について考察してみることは、彼女の後半生の精神生活を探る重要な手がかりになり得ると考え、本稿では源氏物語の「うし」の全用例について次の三つの観点から分析し、その使用法と意味を明らかにしようと試みた。

一、「うし」の対象

二、「うし」と感ずる主体

三、「うし」と感ずる原因

用例の検索は「木下正雄 源氏物語用語索引 国書刊行会 昭49」によって行い、本文の引用は「日本古典文学全集 源氏物語(1)~(6) 小学館」によった。

第一節 対 象

(一)

源氏物語の「うし」については夙に原田芳起氏が次のように述べておられる。(国文学解釈と鑑賞「源氏物語ハンドブック」昭34秋)

「わが身のつたなさを情なく厭わしくつらく思うのが『うし』の本義であり、他者としての『人』をわれに對して無情だ、冷淡だ、むごいと恨むのが『つらし』の本義である。(中略)『宿世』はすべてうき思われ、『世』『世の中』もほとんどうきものであった。それらはしかしわが身の上に観られたものであり『我が宿世』『わが世』であった。」

つまり原田氏は、「うし」と思われるものは「わが身」「わが宿世」「わが世」などすべて自分の側のものであり、それらを情なく厭わしくつらく思う気持を表現する言葉

が「うし」である、と考えておられる。

私は原田氏の説を前提にしつつ全用例を検討し、源氏物語の「うし」の用例を試みに次のように分類した。

- A 「うし」の対象は「うし」と感ずる主体自身であるものが文中に表現されているもの
 - B 文中に対象は表現されていないが「うし」の対象を主体自身と想定し得るもの
 - C 「うし」の対象が世であるもの
 - D 「うし」の対象が他者、或は他者の行為であるもの
- 「うし」のような情形容詞の「対象」とは未だ文法上の確立した概念ではないが、ここでは時枝誠記氏の「感情の志向対象になる事柄を対象語と名付ける」(「古典解釈のための日本文法」70頁 至文堂 昭25)という考えにより、「うし」という感情の志向するものを「対象」と呼ぶ。具体的には、原則として、次のようなものを対象と考えた。

- 1. 連体形「うき」の被修飾語となっているもの
- 2. 格助詞(が、の、を)で受けられて「うし」に連なるもの
- 3. 係助詞(は、ぞ、こそ、も)・副助詞(さへ)で受けられて「うし」へ連なるもののうち、「うし」の志向対象と見做し得るもの
- 4. 助詞がなくてすぐ「うし」に続くもののうち、「うし」の志向対象と見做し得るもの
- 5. 受身尊敬の補助動詞によって暗示される人
- 6. 受身の助動詞によって暗示される人

「原則的に」と断ったのは、上記の形をとらなくとも対象と考えた例があるからである。(主にBグループ)

調査の結果、Aグループ57例、Bグループ35例、Cグループ63例、Dグループ55例、計210例であった。以下各グループについて実例を挙げて説明する。

(二)

Aグループとは、「うき身」「身のうき」「身をうき思ふ」「(自分の状態)がうき」「うき宿世」「うき名」などの形をとり、対象が主体自身、或は主体に属するもの(宿世、名、罪など)であることが明らかな用例である。これらの「うし」は、主体自身に向けられた悲しみや嘆きの感情を意味している。紙数の制約上、はじめの10例のみを見本として挙げ、以下は通し番号で示しておく。用例の番号は、本稿の最後に掲げた全用例の通し番号であ

* 国文学研究室

心する身の処し方が浮舟の事態の受けとめ方を示している。²⁰⁶の「うし」は、浮舟自身を嘆く言葉と解することができ、対象は主体自身である。

他の例についての説明は省略するが、B グループとはこのように「うし」の対象が文中に表現されないが、前後の文脈から、或は他の個所からの類推により、対象が主体自身と想定できるものである。このグループについてもはじめの10例のみ記し、他は通し番号を記す。

- ⑨ 慰めがたくうしと思へば(帚木卷)
- ⑫ いたくうめきてうしと思したり(帚木卷)
- ⑮ 思し懲りにけると思ふにも、やがてつれなくてやみたまひなましかば、うからまし(空蟬卷)
- ⑱ つらきもうきもかたはらいたきことも、思ひ入れたるさまならで(夕顔卷)
- ㉑ かの伊子の家の小君参るをりあれど、ことにありしやうなる言づてもし給はねば、うしと思しはてにけるをいとほしと思ふに(夕顔卷)
- ㉔ 宮の御気色も、ありしよりは、いとどうきふしに思しおきて、心とけぬ御気色も、恥づかしくいとほしければ(紅葉賀卷)
- ㉚ 定めかねたまへる御心もや慰む、と立ち出でたまへりし御禊河の荒かりし瀬に、いとどよろづいとうく思し入れたり(葵卷)
- ㉜ ながらふる程はうけれどゆきめぐり今日はその世にあふ心地して(賢木卷)
- ㉞ 女はうきに懲りたまひて、昔のやうにもあひしらへきこえたまはず(滯標卷)
- ㉟ 馴れゆくこそげにうきこと多かりけり(朝顔卷)
- ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㊰ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

(四)

Cグループとは「うし」の対象が世であるものである。世とは、主体の周囲の状況、男女の仲、人生一般などを指す。

このグループもはじめの10例を見本として示し、以下は通し番号を記す。

- ⑭ 私はかく人に憎まれても習はぬを、今宵なむ初めて
うしと世を思ひ知りぬれば（空蟬巻）
- ⑳ 空蟬の世はうきものと知りにしをまた言の葉にかか
る命か（夕顔巻）
- ㉑ 心から、などかかうき世を見あつかふらむ、かく
心苦しきものをも見てみたらで（末摘花巻）
- ㉒ まことは、うしや世の中よ（紅葉賀巻）
- ㉓ 大将殿は、悲しきことに事を添へて、世の中をいと
うきものに思ししみぬれば（葵巻）
- ㉔ うしと思ひしみにし世もなべて厭はしうなりたまひ

て (葵卷)

- ③⑨ 世の中のいとうくおぼゆるほど過ぐしてなむ、人にも見えたてまつるべき（葵巻）
- ④① 親添ひて下りたまふ例も、ことになけれど、いと見放ちがたき御ありきまなるにことつけて、うき世を行き離れむと思すに（賢木巻）
- ④② 事にふれてはしたなきことのみ出で来れば、かかるべきこととは思ししかど、見知り給はぬ世のうさに、立ちまふべくも思えず（賢木巻）
- ④④ もの心細く、なぞや、世に経ればうさこそまされ、と思し立つには（賢木巻）

48 49 50 51 52 54 55 57 58 60 61 69 73
 74 75 77 80 81 83 85 86 89 91 94 96 110
 114 117 128 129 132 137 144 147 148 151 152 153 155
 157 161 164 171 172 175 176 178 183 194 200 201 202
 208

以上のうち「世」という言葉が文中になくとも対象を世と想定したのは次の3例である。

- ⑧0 うきめ見しそのをりよりも (総合巻)
 ⑧5 誰うきもの、とおし返し恨みたまふ (薄雲巻)
 ⑧6 いとどかかるかたをうきものに思ひはてて (総角巻)

㊦の「うきめ」とは須磨謫居時代を指すが、この謫居に関して、源氏は「うき世」「世のうき」などを多用している。故に㊦も対象を世と考えた。

㊤は引歌による表現である。「うたかたも思へば悲し世の中を誰うきものと知らせそめけむ」という引歌により、対象を世と想定した。

⑩の「かかるかた」とは、男女の交際、結婚生活一般をさし、これは平安朝文学では普通「世」という言葉で表現される。故に⑩の対象も世と想定した。

Cグループの諸例を見ると、平安時代の人にとっての「世」は、現代人の考えるような自分から切り離され自分と相対する存在としてではなく、自分をも包摂するものとして意識されているようだ。前述の書で原田氏が使われた「我が世」という言葉も、このような意味で用いられているものと思う。Cグループの「うし」も、自分を包摂する「世」に向けられた悲しみや嘆きの感情を表すと見てよい。

(五)

今まで述べたA・B・Cグループ計155例は、対象を主体自身、或は世、と想定できるものであり、原田氏の説の範疇に入るものであった。しかし残りの55例は他者或は他者の行為が対象であるものであり、原田氏の説に反する如く見える。これをDグループとする。

Dグループの中には、対象は勿論、意味も今まで述べ

たA・B・Cグループの諸例とは正反対に見える例が多くある。しかし平安時代の人が「うし」の一語でA～Dを表現しているからには、彼らにとってはその全部に共通する包括的感情が意識されていたのではなからうか。この疑いを持ちつつDグループの全用例を検討し、「うし」の表す心理を探ってみたい。検討にあたっては、対象の表し方によりa～gの七項目に分けて行う。

a. 連体形「うき」が「こと」「もの」「ふし」にかかっており、その「こと」「もの」「ふし」が、他者の行為や態度、他者のおこした事件を意味する例

⑦ さるうきことやあらむとも知らず（帯木巻）

雨夜の品定めの中將の言葉であるが、「うし」の主体は夕顔として解釈する。「うきこと」とは、頭中將の北の方が夕顔に対し脅迫めいたことを人を介して言ったこと。この仕打を受けても、夕顔が北の方に対して対抗的な気持を持たなかったことは、⑦の文に続く「むげに思ひしをれて心細かりければ」という叙述や、「山がつの垣は荒るともをりをりにあはれはかけよ撫子の露」という、頭中將に宛てた哀願の調子の強い歌によって知られる。夕顔にとって正妻の脅迫は、自分の立場を思い知るきっかけとして受けとめられている。だからこの例の「うし」は、北の方の脅迫を非難したり恨んだりする気持を表すのではなく、夕顔自身の境遇を悲しむ感情を表す言葉であらう。

⑩ 御名隠しもさばかりにこそは、と聞こえたまひながら、なほざりにこそ紛らはしたまふらめとなん、うきことに思したりし（夕顔巻）

夕顔の死後、右近が夕顔の心中を源氏に語る言葉である。「うきこと」とは、源氏が夕顔に素姓を明さなかったことを指す。夕顔は、そういう源氏の態度によって、なおざりにしか相手にしてもらえぬ自分の身分を意識し、悲しく思っていたのである。この「うし」は、源氏を非難したり恨んだりする感情ではなく、夕顔が自分自身を悲しく嘆かわしく思う感情を表現していると思われる。

⑩ まことの親のあたりならましかば、おろかには見放ちたまふとも、かくざまのうきことはあらましかば、と悲しきに（胡蝶巻）

親らしからぬ源氏の振舞に、玉鬘が困惑している場面である。「かくざまのうきこと」とは、源氏が「近やかに臥」したことを指す。この源氏の行為を、玉鬘はどのような気持で受けとめているのだろうか。螢巻にここと同様な場面がある。

姫君は、かくさすがる御気色を、わがみづからのうきぞかし（中略）と起き臥し思しなやむ。

「かくさすがる御気色」とは、やはり親らしからぬ源氏の態度を指すが、そのような態度に出会った玉鬘は、

事態を「わがみづからのうき」と受けとめている。故に同様な場面である⑩に於いても、玉鬘は源氏の行為を、嫌悪すべきものというより、親のあたりにも住めぬ異常な自分の宿命を思い知らせるものとして受けとめているのであらう。

⑩ うきことを思ひ騒げばさまさまにくゆる煙ぞいとど立ち添ふ（真木柱巻）

鬚黒大將の歌である。「うきこと」とは、北の方が狂乱して灰をかけたことを指す。今まで見てきたところでは、「うきこと」が他者のひき起こしたことであっても、主体にその他者を憎んだり嫌ったりする感情はなく、「うし」は被害を受ける自分を嘆く感情を表していた。この例も今までの例に準じて考えると、鬚黒は北の方の行為を嫌悪の気持で捉えているのではなく、妻が予想だにできなかった狂態を示し、それを自分の身に引き受けなければならないという、夫としての暗然とした嘆きの気持で捉えているのではなからうか。

⑩ うきことに胸のみさはぐひびきにはひびきの灘もさはらざりけり（玉鬘巻）

筑紫からの船中で玉鬘の乳母がよんだ歌である。「うきこと」とは、大夫監が追ってくるかもしれない、という恐れである。これも今までの例に従って考えると、大夫監の追跡を憎むのではなく、自分の状況への不安や嘆きを「うし」で表しているのではなからうか。

⑩ かく人づてならずうきことを知る知る、ありしなら見たてまつらむよ（若菜下巻）

柏木の女三宮宛の手紙を読んだ直後の源氏の述懐である。「うきこと」とは、女三宮と柏木の密通を指す。この「うし」は、妻の懷妊が柏木によるものだと思った時の重苦しい感情を表したものであって、源氏の気持は女三宮や柏木を非難するよりも、まず、自分が背負いこまねばならぬこの事件を暗い気持で見つめているものと受けとれる。

⑩ けしからずうきことと言ひ出づるたぐひも聞こゆかし（若菜下巻）

娘夫妻の仲を心配する朱雀院の心中である。「けしからずうきこと」とは、女三宮が他の男と関係をもつこと。自分の娘の不行跡は親の立場として嘆かわしいことである。「うし」とは、親としての嘆きの気持を表しているのであらう。

⑩ 我がながらもえ思ひなほすまじう、うきことのうちまじりぬべきを（柏木巻）

女三宮に対し自分がつらく当たるのではないかと、源氏が心配する個所である。「うきこと」とは、女三宮に対する源氏の冷たい仕打ちをさす。主体は女三宮とともれるが、私は源氏とし、源氏は自分の態度を客観化していると解してみた。即ちこの「うし」は、女三宮に対する

態度に自分ながら人間の暗い性情を見て暗澹としてしまふ源氏の気持を表しているのではなからうか。

- ⑬ うきふしも忘れずながくれ竹のこは捨てがたきものにぞありける(柏木巻)

源氏の歌である。「うきふし」とは女三宮と柏木の密通のこと。前述した⑬と同様に、源氏はこの事態を、自分の気持を暗くする嘆かわしい出来事として受けとめているのではないと思われる。

- ⑭ 月日にそへて、この君のうつくしう、ゆゆしきまで生ひまさりたまふに、まことに、このうきふしみな思し忘れぬべし(横笛巻)

「このうきふし」は⑬の歌を受けたものであり、「うし」の表す心理も⑬と同様に考えてよいと思われる。

- ⑮ かかる筋につけて、いと軽くうきものにのみ世に知られたまひぬめれば、心憂くなむ(手習巻)

匂宮の性癖の外聞を心配する明石中宮の言葉である。「うし」は、好色な息子を持つ、親としての嘆きを表す語とも受けとれるし、又、「誰でもか嘆かわしいと思う、困った人として世に知られ」のように、匂宮の属性を表す語としても受けとれる。

- ⑯ うきことを聞きつけたらむこそいみじかるべけれ(手習巻)

薫が浮舟の話を横川僧都から聞き、浮舟の今の暮しぶりを邪推する個所である。「うきこと」とは、浮舟が他の男と関係を持っているというようなこと。「うし」は事態に対する薫の非難や嫌悪の感情とも受けとれるが、妻の密通を知った場合に「うし」と感ずる例は他にもあり、それらは嫌悪や非難の情よりも、夫としてのやりきれない悲しみが感じられるので、この例も「自分に嘆かわしい悲しい気持をおこさせること」と解しておく。

以上、「うきこと」「うきもの」「うきふし」の例を見てきた。「こと」「もの」「ふし」は他者の行為や態度及び他者によっておこった事件を意味するのだが、用例を見ると、主体はこれらの出来事を、自分に起こったこと、自分の側のこと、として捉えているようだ。

b. 他者或は他者の行為が、係助詞(は、も、こそ、ぞ)又は副助詞(さへ)を介して「うし」に連なる例、又は助詞を介さないで「うし」に連なる例

- ⑰ さすがに、絶えて思ほし忘れなんことも、いと言ふかひなくうかるべきことに思ひて(夕顔巻)

源氏が全く空蟬を忘れてしまった時のことを考えて、空蟬は「うかるべき」と予想する。「源氏が空蟬を忘れること」が「うし」の対象の如く表現されているが、源氏をして忘れるように仕向けるのは空蟬自身であるから、彼女は源氏の忘却を非難しているのではなく、忘れられた場合の自分の悲しみを予想しているのである。「うか

るべき」とは、「源氏からすっかり関心を持たれなくなったら、さぞつまらない悲しい気がするだろう」の意であらう。

- ⑱ 咲きてとく散るはうけれど行く春は花の都を立ち帰り見よ(須磨巻)

須磨へ行く源氏を送る王命婦の歌である。上二句は「咲いてすぐ散る、即ち源氏が栄えそして失脚したことは自分にとってつらいけれど」という意味で、「うし」は王命婦の悲しみの気持を表している。

- ⑲ 人の心こそうきものはあれ(少女巻)

孫二人が隠しだてをしがちだったこと、息子の内大臣が雲居雁を自邸にひきとってしまったことを嘆く大宮の言葉である。これは、愛する肉親が期待に反して自分に冷たいことをした時、肉親にすら見出さねばならなかった人の心の冷たさを悲しみ嘆いて発せられたのであらう。大宮は、孫や息子を非難したり恨んだりしているのではないと思う。

- ⑳ おはせし方、年ごろ遊び馴れし所のみ、思ひ出でらるることまされば、里さへうくおぼえたまひつつ、また籠りゐたまへり(少女巻)

夕霧は、雲居雁と馴れ親しんだことが思い出される大宮邸には行かず、二条院で学問に没頭する、というのである。この巻で夕霧は、内大臣によって雲居雁と引き離されたこと、雲居雁の乳母から「六位宿世」と蔑まれたことを頻りに嘆き、涙を流している。「里さへうくおぼえたまひつつ」とは、「大宮邸という場所までも、恋人と引き離され、位が低いと蔑まれたことを思い出させ、自分を悲しい気持ちにさせる、とお感じになって」の意であらう。

- ㉑ いかかなりぬるとだに御耳とどめさせたまはぬも、ことわりなれど、いとうくもはべるかな(柏木巻)

重態の柏木が、便りをくれない女三宮へ宛てて書いた手紙である。柏木は女三宮を非難しているのではなく、女三宮から顧みられない自分の悲しさを「うくもはべるかな」と言っているものと思う。

- ㉒ いにしへの秋の夕の恋しきにいまはと見えしあけぐれの夢、ぞなごりさへうかりける(御法巻)

野分巻と御法巻でわずかに見ることの出来た紫上の姿を思い出してよんだ夕霧の歌である。「あけぐれの夢」とは、あけぐれの薄暗がりで見えた夢のように美しい紫上の臨終の姿、という意であり「夢」という語には、幻のように見ただけで手にとることはできなかった、という気持がこめられているのであらう。夕霧は、野分巻以来紫上に強く心を惹かれながら、結局は無縁のままで終ってしまったことを嘆いているものと思われる。

- ㉓ かくいまいましき身の添ひたてまつらむも、いと人聞きうかるべし(桐壺巻)

桐壺更衣の母の心中語で、娘に先立たれ、年老いた自分が若宮に付き添って参内するのは外聞が悪かろう、と心配している。「人聞き」は自分にとってつらいこと悲しいことであろう、と言っていると思われる。

⑪③ さやうなることの世に漏り出でんこと、いとうきことなり（若菜上巻）

この例は朱雀院のことばで、女三宮が女房の手引きでつまらぬ男と結婚してしまうことを仮定し、その噂が世に漏れることを心配したものである。娘の不行跡が世に知られることを、親として嘆いていると考えられる。

⑪④ うしろめたき筋のことうきものに思し知りて（若菜下巻）

「うしろめたき筋」とは、夫の立場として心配なこと、つまり人妻の密通一般を指している。これも今までの例から考えると、「人の心を暗くする出来事」という意であり、人妻の密通は非難すべきものだと思い知った、というのではなからう。

⑪⑤ つひに聞き合はせたまはんこと、いとうかるべし（浮舟巻）

浮舟が匂宮にも薫にも別れの文を書けば、匂と薫は互いにそれを知るだろう、それは浮舟にとってとてもつらいことだ、の意。「うし」は浮舟の悲しみ、嘆きの感情を表す。

c. 他者が、連体形「うき」の被修飾語になっている例

④⑥ 「うき人しもぞ」と思し出でらるおしあけ方の月影に（賢木巻）

これは「天の戸をおしあけ方の月見ればうき人しもぞ恋しかりける」という引歌による表現であり、「うき人」とは源氏から見た藤壺を指す。源氏の藤壺に寄せる心情及び引歌の内容を考えあわせると、「うき人」とは、原田氏も前述の書で触れておられるとおり、「源氏をうしという気持ちにさせる人」の意であり、源氏は冷たい藤壺を恨んだり非難したりはしておらず、冷たくされる自分を嘆いていると思われる。

⑥② 年経つる苫屋も荒れてうき波の返るかたにや身をたぐへまし

明石女君の歌である。「うき波」とは、都に帰ってしまう源氏のこと。明石女君は、父親とは違って、一途に源氏との結婚を喜ぶ気にはなれず、源氏との関わり合いの中でいつも身分の違いを感じ、源氏から顧みられなくなれることを不安に思っている。ここは、源氏の帰京に際し、改めて自分と源氏の身分差や、源氏の愛情の不確かさを認識させられ、発した「うし」であろう。「うき波」とは④⑥と同様、「自分（明石女君）をうしという気持ちにさせる波」と解せる。

⑩⑥ かの監がうかりしさま（螢巻）

玉鬘が大夫監を思い出している個所である。監のありさまは、玉鬘にとって嫌悪感を誘うものでもあったろうが、同時に自分の心細い境遇を思い知らせるものでもあったろう。④⑥②などを解した方法をこの例にも用いると、⑩⑥は「親と別れ、筑紫で心細く生い立ち、挙句土地の豪族につきまとわれねばならない我が身だと思知らされるような監のありさま」という意味であろうと思われ、「うし」は監に対する玉鬘の嫌悪感を表すのではなく、玉鬘自身の境遇を嘆く気持ちを表すと見てよいのではなからうか。

⑤ 手を折りてあひ見しことを数ふればこれひとつやは君がうきふし（帚木巻）

左馬頭が指喰いの女に贈った歌。「君がうきふし」とは、嫉妬深さという、この女の持つ短所をさす。「うし」は女に対する左馬頭の嫌悪を表すとも受けとれるが、今まで見てきたc項の例の解釈の方法をここにもあてはめると、「君がうきふし」とは「自分（左馬頭）をうしという気持ちにさせる女の嫉妬深さ」ということになり、「うし」は、女の欠点に出会った男のやりきれなさを表すと解せる。

⑥④ うきふしを心ひとつに数へきてこや君が手を別るべきをり（帚木巻）

⑤に応酬した指喰いの女の返歌である。「うきふし」とは、浮気っぽいという左馬頭の欠点。女は左馬頭の浮気によって、かまわれない自分を悲しく嘆かわしく思ったことだろう。この「うし」も左馬頭の浮気心を非難するというより、男の浮気心によってつらい思いをする自分を悲しく思う意を表していると思う。猶、⑤はa項に入れるべきであるが、⑥の返歌なのでここで考察した。

⑩⑦ すこしうきさまをだに見せたまはばなむ、思ひさますふしにもせむ（総角巻）

臨終の大君の枕辺に坐る薫の心中語である。薫は、大君の死相を見つけることが出来れば、思慕の情も少しは薄らぐのではないかと思っている。「うきさま」とは大君の死相を指すが、薫にとって大君の死相とは、人間とは終局には死を迎える嘆かわしい存在なのだと思う。諦念を呼びおこさせるもの、という意味をもつのではなからうか。だから「うきさま」とは、嫌悪感を起こさせるようなさま、というのではなく、人間の死に至る宿命を思い起こさせるようなさま、ということにならう。この「うし」は人間全般に対する悲しみの感情と表すといってよいのではなからうか。人間全般とは、平安朝のことばで言えば「世」が当たるだろう。

⑩⑧ 恐ろしげにうきことの、悲しさもさめぬべきふしをだに見つけさせたまへ（総角巻）

前例と同じ状況である。「うし」も⑩⑦と同様に考えてよいであろう。この例はa項に入れるべきであるが⑩⑦と同状況なのでここで考察した。

㊦ いとうき人の御ゆかりなり (総角巻)

大君の死の原因となった匂宮と中君の夫婦関係を、中君が嘆く個所である。中君は、夜離れを続ける匂宮の妻となった自分を嘆いているのだろうと思われる。

㊧ 思ひのほかにはうかりける御心かな (宿木巻)

中君に薫の移り香を嗅ぎとった匂宮が、中君に言った言葉である。中君を非難したり嫌悪したりしているとも受けとれるが、妻が他の男に心を移した際に夫が「うし」と感ずる例は前にもあり、これらは必ずしも妻を憎んでいるととる必要はなかった。だからこも、妻に心変りをされたと思った匂宮の嘆きを表していると見てよいのではなからうか。

㊨ いみじうき水の契りかな (蜻蛉巻)

浮舟の入水を悲しむ薫の心中語である。薫は、浮舟が入水を決心したのは眼の前に宇治川があったからだ、と思う。「うき水の契りかな」とは、自分を浮舟の死という悲しいめにあわせた宇治川の因縁を嘆いた言葉であろう。

㊩ われもまたうき古里を荒れはてばたれやどり木のかげをしをばむ (蜻蛉巻)

薫の歌である。「うき古里」とは、八宮、大君、浮舟と次々に愛する人を失った悲しみを思い起こさせる宇治の里という意であり、「うし」は、彼らの死を悲しむ薫の気持を表している。

d. 他者が、格助詞「を」を介して「うしと思ふ」「うしと知る」などに連なる例、又は連体格「うしと思ふ」の被修飾語になっている例

③ うしとも思ひ離れぬ男 (帚木巻)

これは雨夜の品定めの中の一節で、「うしとも思ひ離れぬ」の主語は、左馬頭の話に出てくる女である。具体的状況ははっきり語られないが、おそらくこの女は、男の愛情が薄いのでさっさと尼になってしまったのだろう。

「うしとも思ひ離れぬ男」とは「自分(女)を落胆させ悲観させ、そしてすっかり自分の気持が離れてしまったのでもない男」という意であり、「うし」は冷たい男を恨むのではなく、冷たくされる自分を悲しむ気持を表す語と解するのはなからうか。

⑧ 「現ともおぼえずこそ。数ならぬ身ながらも、思し下しける御心ばへのほどもいかに浅くは思ふたまへざらむ。いとかなうなる際は際とこそはべなれ」とて、かくおし立ちたまへるを深く情なくうしと思ひ入りたるさま (帚木巻)

方違えのために泊った源氏によって、深夜、寝所から連れ出された空蟬は必死の抗議をし、源氏の強引な行為を「深く情なくうし」と思っている。「うしと思ひ入りたる」というのは、空蟬が源氏の「おし立ちたまへる」という強引な行為を非難しているのではなく、源氏からこ

のような人もなげな振舞を受けても仕方のない「数ならぬ身」即ち受領風情の妻である自分の立場を、情なく悲しく思っている、というのだろう。

⑤③ いま一たびに対面なくてやと思すは、なほ口惜しけれど、思し返して、うしと思しなすゆかり多うて、おぼろけならず忍びたまへば、いとあながちに聞こえたまはずなりぬ (須磨巻)

須磨謫居の前に、源氏は朧月夜と逢いたい、文も一度ならず通わせたい、しかし「うしと思しなすゆかり」が多く、人目を憚らねばならぬことを思い返して、思いとどまる、というのである。「うしと思しなすゆかり」とは「源氏が朧月夜の縁者をうしと思う」のか「朧月夜の縁者が源氏をうしと思う」のか、二説あるが、今までの例に見られたような悲しみ、嘆きの気持を考慮に入れると、前者の説をとった方がよいように思われる。反源氏側の人物が「うし」の主体となるのは他に一例のみ(㉞)なのもこの考えを裏付ける。須磨巻での源氏は、弘徽殿大后方の人々を憎む、というような強い気持にはなっていない。ここでも源氏は朧月夜の縁者たちのことを「自分を悲運に陥れた人々」と思っているであろう。源氏の気持は自分の悲運を嘆く感情が主になっており、相手を憎む感情は少ないと思われる。

㉞ 兵部卿の親王、年ごろの御心ばへのつらく思はずにて、ただ世の聞こえをのみ思し憚りたまひしことを、大臣はうきものに思しおきて (濡標巻)

不遇時代に冷淡であった兵部卿の親王(紫上の父)の態度を、源氏は「うきもの」と心中忘れずにいる、というのである。妻の父という近しい関係にありながら、源氏に同情を寄せるより世間の思惑を慮った親王の態度に、源氏は人の心の冷たさを見、嘆いているのであろう。それは憎むべき相手の態度ではあるが、源氏の心の中は、嘆き・悲しみの感情が主になっているのだろう。

しかしこの文の後に、源氏がこの舅に対し少々つらく当たったことが書いてある。今まで見てきたところでは、「うし」と感ずる人物は、この感情を抱かせる相手に対して何ら対抗的手段をとらないことが特徴的であった。この例は、その点で数少ない例外の一つである。相手に対して対抗的手段をとるということは、主体の心に、自分に向けられた悲しみの気持だけではなく、相手に対する不快感があることを示唆しているのではなからうか。「うし」は殆どの場合、自分に向けられた嘆きや悲しみの感情を表すと考えられるものの、中にはこの例のように、相手に対する不満、不快感が入りこんでいることを認めてもよいような例もある。

㉞⑩ しばしつらかりし御心をうしと思へば、つれなくもてなししづめて (梅枝巻)

かつての内大臣の処置を今も夕霧はうしと思うので、内

大臣が雲居雁との結婚を許す気色を見せても、無関心を装う、というのである。「つらかりし御心」が実際に語られている少女巻での夕霧の心境は⑨③(b項)で説明したとおりである。この「うし」もやはり内大臣の心をつらく悲しく思い嘆く意であろうが、少女巻の巻から六年を経たこの梅枝巻の「うし」には、前の⑦⑩と同じく、いささか内大臣のしうちを不快に思う気持ちが混っていることを認めてよいのではなからうか。夕霧は「つれなくもてしづめ」る、という内大臣への対抗的手段をとっているのだから。

⑩⑤ 大殿の君、うしと思す方も忘れて、こはいかなるべきことぞと悲しく口惜しければ(柏木巻)

女三宮が出家を遂げる場面である。「うしと思す方」とは、女三宮と柏木の密通事件のこと。この事件に関して源氏の抱く「うし」という感情については既に述べた(a項の⑩⑧)。ここも非難や憎悪の気持ではなく、夫としてのやりきれない重苦しい悲しみの感情を表すのではなからうか。

⑩④ おほかたのあきをばうしと知りにしをこは捨てがたき鈴虫の声(鈴虫巻)

女三宮の歌。上三句は、夫が自分を飽き厭うことは、自分にとってつらい悲しいこととよくわかったのに、という意である。「うし」は、夫から厭われた女三宮の悲しみを表す。

⑩⑥ 何ゆゑか世に数ならぬ身一つをうしとも思ひかなしとも聞く(夕霧巻)

落葉宮から内大臣に宛てた歌である。「身一つ」とは落葉宮のこと。「うしとも思ひ」の主語は内大臣だから、「身」という語が対象だがDグループである。「なぜ私のことをあなたはうしと思うのでしょうか」と宮が内大臣の心を付度しているのだが、この内大臣の心とは、娘の夫の気持が宮へ移ってしまった事態での親としての嘆きの心であろう。宮もそれを推察してこのように言っているのではなからうか。

⑩⑩ 枯れ果つる野辺をうしとや亡き人の秋に心をとどめざりけむ(御法巻)

紫上の死後、秋好中宮が故人の心を推察して詠んだ歌。枯れ果てた野辺は、人間の死とか滅びを連想させ、寂寥感、悲哀感を誘うものである。紫上はこういう野辺を人間の死を象徴するものとして、悲しみの気持で見ているのだろう、と秋好中宮は推察しているのである。この悲しみは、死という人間の宿命へ向けたものだと考えられないだろうか。

⑩⑨ 思ひもてゆけば、宮をも思ひきこえじ、女をもうしと思はじ、ただわがありさまの世づかぬ怠りぞ(蜻蛉巻)

薫の心中語である。「女をもうしと思はじ」とは、「入水

した浮舟のことを、自分を暗い悲しい気持ちにさせる女だと思ふまい」の意であろう。この「うし」は妻に密通をされた男の重苦しい嘆きを表していると思われ、源氏が女三宮の密通に関して発している「うし」と同様である。

e: 受手尊敬の表現「思ひきこえ」を伴う例

②④ 故姫君のいと情なく、うきものに思ひきこえたまへりしに(若紫巻)

兵部卿宮の北の方に対する故姫君(紫上の母)の心情を少納言乳母が源氏に語る言葉である。受手尊敬の補助動詞「きこえ」があるので、故姫君がうきものと思う対象は他者(この場合は北の方)とわかる。前に夕顔が正妻の脅迫を「うきこと」と感じる例(⑦a項)があったが、②④でも紫上の母は正妻の存在によって側室である自分を悲しく嘆かわしく感じたのだらうと思われる。「うきものに思ひきこえ」とは「紫上の母は、北の方のことを、自分を悲しい気持ちにさせる方だと思ひ申し上げ」の意であろう。

④③ 男は、うしつらしと思ひきこえたまふこと限りなきに、来し方行く先かきくらす心地して、うつし心失せにければ(賢木巻)

とりあってくれない藤壺を源氏が「うしつらし」と思う個所である。源氏は藤壺から冷たくされる自分を情なく悲しく感じたであろう。この例も上の②④と同様、「源氏は藤壺を、自分に情ない思いをさせるお方だと思ひ申し上げ」の意であろうと思われる。

⑤⑨ あはれに思ひきこえし人を、ひとふしうしと思ひきこえし心あやまりに(須磨巻)

源氏が六条御息所の生霊事件のことを回想している個所である。葵巻で、生霊が六条御息所だとわかった時、源氏は「あな心う」と思っている。この「心う」は、生霊に対する嫌悪感というより、愛人の妄執に対する暗い悲しみを表しているのだらう。⑤⑨の「うし」にも同様の気持を汲みとってよいと思う。しかし又、この「うし」には生霊となって現れた御息所に対する嫌悪感も混じっているのではなからうか。源氏は「その後(葵上の死後)しもかき絶え、あさましき御もてなし」(賢木巻)を御息所に見せたのだから。

⑤⑩ よろづに聞こえ悩ますも、うるさくわびしくて、ものもさらに言はれたまはねば、「はてはてはむくつてくこそなりはべりぬれ。またかかるやうはあらじ」といとうしと思ひきこえて(若葉下巻)

密会の際の別れの場面である。柏木は女三宮に一言でも言葉をかけてくれと哀願するのだが、宮は黙ったままである。柏木は言葉をかけてもらえない自分を情なく悲しく思ったであろう。「うしと思ひきこえ」とは、「自分を情なく悲しい気持ちにさせるお方だと思ひ申し上げ」の意

であろう。女三宮の沈黙を非難する気持はないと思う。

f. 受身の助動詞「れ」を伴う例

- ⑦② あぢきなきすき心にまかせて、さるまじき名をも渡し、うきものに思ひおかればべりにしをなん、世にいとほしく思ひたまふる（澪標巻）

源氏が、葵巻、賢木巻当時の御息所と自分の関係をふりかえっている個所である。「うきものに思ひおかれ」とは、源氏が六条御息所からうきものと思われたこと。受身でない言い方に直すと、御息所が源氏をうきものと思った、ということになる。葵巻で御息所は、「身のうきほど」「みづからぞうき」「身ひとつのうき嘆き」などと言っており、愛情の薄い源氏を恨んだり非難するより、冷たくされる自分を悲しむ心境である。だから彼女が源氏をうきものと思う、というのは、源氏のことを、自分を悲しい気持ちにさせる人だと思ふ、という意である。源氏もそういう御息所の心境を推察して⑦②のように言ったものかと思う。

- ⑧④ この人にうしと思はれて、忘れたまひなむ心細さはいと深うしみにたれば（浮舟巻）

浮舟が、薫にうしと思われ、薫が自分を捨ててしまった場合のことを想像している個所である。「この人にうしと思はれ」とは、受身でない言い方に直すと、薫が浮舟をうしと思うということである。この「うし」は、源氏が女三宮の密通に関して使った「うし」と同じく、愛人の密通を知った時の重苦しい嘆きの感情であろう。「うきものに思はれて」は「自分（薫）をうしという気持ちにさせる女だと薫から思われて」のであろう。

g. 最後に、他者は対象として文中に表現されないが、同一人物、同一状況下の他例がDに属するか、又は諸注釈書が対象を他者と解しているの、Bには入れずDに入れた例を考察する。

- ④ まことにうしなども思ひて絶えぬべき気色ならば（帚木巻）

文中に対象はないが⑤（c項）と同一人物、同状況なのでDグループに入れた。この「うし」は、⑤と同じく配偶者の欠点に接した際の夫の嘆きを表すのだろう。

- ③⑩ かの御車の所争ひをまねびきこゆる人ありければ、いといとほしう、うしと思して（葵巻）

岩波大系、玉上氏の評釈、小学館の全集、共に「いとほしう」は御息所に対する、「うし」は葵上又は葵上方の行動に対する所感と解しているので、文中に対象は表現されていないがDグループに入れた。当時女房や召使の行動は主人の気風の反映と見られていたから、下人の狼藉を抑えられなかった葵上の人柄を思い、源氏は「うし」と感じたのであろう。この「うし」は葵上に対する非難

や嫌悪の情とも見られるけれども、配偶者の好ましからぬ性情に触れた際の、夫としての嘆きを表すと解せるのではなかろうか。

- ④⑩ その後しもかき絶え、あさましき御もてなしを見たまふに、まことにうしと思す事こそありけめと、知りてはたまひぬれば（賢木巻）

葵巻の生霊事件の約一年後に、六条御息所が源氏の心を推量したものであり、⑤⑨（e項）と同一人物、同状況で使われているのでDグループに入れた。⑤⑨と同じく、この例の「うし」には、愛人の妄執に触れた時の暗澹とした気持ちもぐみとれるが、又、六条御息所の生霊に対する気味悪さ、嫌悪感もぐみとれる。御息所もその両方の気持ちを源氏の心の中に見て④⑩のように思っているのではなかろうか。

- ⑪⑨ あやにくに、うきに紛れぬ恋しきの苦しく思さるれば（若菜下巻）

「うき」とは、女三宮の密通を知った後の源氏の感情のことである。同様な「うし」の例（⑪⑨⑫⑬⑭⑮）がDグループに属するので、⑪⑨もDに入れた。この「うき」も⑪⑨（a項）などと同じ源氏の感情を表すと思われる。

- ⑬③ 人目にこそ変ることなくもてなしたまひしか、内にはうきを知りたまふ気色しるく（鈴虫巻）

「うき」は、女三宮の密通事件をさす。これも⑪⑨などと同じと考えてよいだろう。

- ⑬⑧ 女のいたくもの思ひたるさまなりしも、片はし心えそめたまひては、よろづ思しあはするに、いとうし。

（浮舟巻）

浮舟と匂宮の関係を知った時の薫の心境である。Bに入れるべき例かもしれないが、⑬⑧⑨という類例があるので、Dに入れた。薫の心境は、やはり愛人の密通に出会った暗澹とした悲しみの中にあるのだらうと思われる。

（Dグループのまとめ）

以上、対象が他者である55例について見てきたが、その他者は、全ての例において「主体をうしという気持ち、即ち悲しいつらいという気持ちにさせる他者」と解し得るようだ。Dグループの「うし」が、主体自身や人間全般に対する嘆き、或は好ましからぬ他者の状態や行為に出会った時の主体の悲しみを表しており、他者に向かう非難や憎しみを表すのではない、という点では、A・B・Cグループの「うし」と同じである。

Dグループの中には、「うし」という感情の中に、自分を悲しい気持ちにさせる他者に対する不快感、嫌悪感が入りこんでいる例もあるが、これらの例でも、「うし」が一方的に相手に向かう嫌悪・憎悪の情を表すと見るのは誤りであって、やはり自分への嘆きが先行し、次に自分を嘆かせるものへ気持ちが向けられていると見るべきだろう。

第二節 主 体

(一)

次に「うし」と感ずる主体を、第一節で述べたA～Dの四分類別に表に示す。主体を考えるにあたって考慮したのは次の点である。

1. 地の文や主体自身の会話・心中語に「うし」が使われる他に、他の登場人物によって推量される場合もある。(例 ⑦は頭中将による夕顔の心中の推定で、主体は夕顔)
2. 主語が複数の場合は、その両方を主体と考えて表にした。
3. 「うし」が属性表現の形容詞のように使われ、主語を定め難い例がある。この場合は話手を主体と考えた。

用例数の多い人物順に挙げると次表のようである。

人 物 名	計	A	B	C	D
源氏	41	1	3	22	15
浮舟	19	5	8	5	1
薫	13	1	3	1	8
中君	11	6	1	3	1
空蟬	10	5	2	1	2
六条御息所	10	7	1	1	1
落葉宮	10	5	1	3	0
大君	9	4	1	4	0
明石女君	8	5	0	2	1
玉鬘	8	4	1	1	2
藤壺	7	2	2	3	0
落葉宮母	6	1	4	1	0
女三宮	5	1	2	1	1
夕顔	4	1	1	0	2
雲井雁	4	2	1	1	0
夕霧	4	0	0	1	3
朧月夜	3	2	1	0	0
紫上	3	0	1	1	1
末摘花	3	1	0	2	0
鬘黒北方	3	2	0	1	0
柏木	3	0	0	1	2
桐壺更衣母	2	1	0	0	1
左馬頭	2	0	0	0	2
明石乳母	2	2	0	0	0
内大臣	2	0	0	1	1
朱雀院	2	0	0	0	2
中将君	2	0	1	1	0
雨夜品定め女	1	0	0	0	1
指喰女	1	0	0	0	1
紫上母	1	0	0	0	1
王命婦	1	0	0	0	1
花散里	1	1	0	0	0
弘徽殿太后	1	0	0	1	0
末摘花乳母子	1	0	0	1	0
明石尼君	1	0	0	1	0
女五宮	1	0	0	1	0

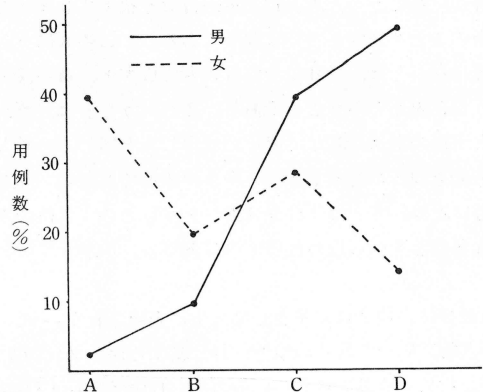
大宮	1	0	0	0	1
雲井雁乳母	1	0	0	1	0
玉鬘乳母	1	0	0	0	1
鬘黒	1	0	0	0	1
藤内侍	1	0	0	1	0
藏人少将	1	0	1	0	0
八宮	1	0	0	1	0
八宮北方	1	0	0	1	0
匂宮	1	0	0	0	1
妹尼	1	0	0	1	0
明石中宮	1	0	0	0	1
古歌の作者	1	0	0	1	0

次表に、上の登場人物を男女に別け、A～D別に示し、

()内に、男女別の全用例数に対する%を記した。

	計	A	B	C	D
男	71 (100%)	2 (2.8%)	7 (9.9%)	27 (38.0%)	35 (49.3%)
女	144 (100%)	57 (39.6%)	28 (19.4%)	39 (27.1%)	20 (13.9%)
男%/女%	1	0.07	0.51	1.40	3.55

男女別に、全用例数に対する四グループの用例数の%をグラフにすると、次図の如くである。



(二)

(一)に於いて、男性は対象が世、又は他者である用例が多く、女性は対象が自分自身である用例が多いという結果が得られた。特に、「うき身」「身のうき」などの形で、対象が自分自身であることがはっきり表現されるAグループでは、男性が主体となるのは2例のみであって、Aグループはほぼ女性に特有な用法と言える。ではAグループの主体となることの多い女性は誰々であろうか。多い順に挙げると、

六条御息所7、中君6、空蟬5、落葉宮5、明石女君5、浮舟5、大君4、玉鬘4である。(他の人物は2例以下。省略する。)

彼女たちの人生を眺めると一つの特徴が浮かび上ってくる。出身はさまざまである——むしろ非常に高いと言

ってよい人物もいる——が、夫や親の早逝、親の没落又は親との離別によって、出身にふさわしい現世の幸せが得られず、次々に不幸を味わうことを余儀なくされる女君たちである。自分の階級や宿命の限界を強く感じている女君たち、と言ってもよい。

物語の中で主要な位置を占める割には「うし」の用例が少ないのが紫上である。3例あるのだが、そのうち2例は引歌による表現であり、残る1例は、死後、秋好中宮によって「枯れ果つる野辺をうしとや……」と推量されるものである。他の女君たちのように、紫上自身による直接的で切実な「うし」の表明はない。第二部あたりから紫上は深刻な苦悩を抱えこむ苦悩ののだが、それも「うし」という言葉では表明されない。何故なのか。紫上は前述の女君たちと反対に、生まれの割には良い結婚をし、現世的な幸せに恵まれ、階級や宿命による限界をあまり感じなくてすむ半生だったこと、第二部の彼女の苦悩は前述の女君たちの苦悩とは違う原因によると紫上乃至は作者が意識していたこと、などを理由として思いつくが、猶検討してみたい。

源氏が主体となるのが41例と群を群いて多いのは登場場面が多いからであろう。しかしC・Dが多く、Aグループは⑩のみである。しかもこれは空蟬にふられた後小君に言うあてつけめいた繰り言で、女君たちのAグループが持つ深刻さには遠く及ばない。彼の「うし」が使われる状況に注目してみると、桐壺～賢木巻では女性に冷たくされた時の使用が多く、賢木～明石巻では政治的失脚や須磨行きに關しての使用が多く、玉鬘十帖では全く用例がなく、若菜下巻以降では女三宮・柏木事件に關しての使用が多く、最後の幻巻では紫上死後の心境を表すのに使っている。源氏の「うし」の使用状況は、彼の人生に起こる主要な事件の推移と一致しているようだ。

猶、「うし」は和歌に使われる度合いが高い言葉である。作中人物の歌に47例、引歌による表現（注3）に16例、合計63例が和歌による表現の中に使われており、これは全用例の3割に当たる。

第三節 原因

(一)

源氏物語の登場人物が「うし」と感ずる原因は実にさまざまであるが、その原因を

I 主体による原因

II 他者による原因

III 主体・他者の両方による原因

に分け、更に19の項目に類型化を試みた。千差万別の原因を19の項目で代表させるのは無理な試みかもしれないが、「うし」の原因を考えることはこの言葉の本質を探るのに是非必要と思い、次のような点に留意しつつ類型

化した。

1. 項目が無制限にならぬよう、類似の原因はなるべく一つの項目にまとめた。
2. 身をうく思ったり、世をうく思ったりする場合、なぜ身や世をうく思うのかという直接的・具体的原因を探ることに努めた。しかし、原因が総合的な場合或は具体的な原因が不確かである場合は(イ)や(ソ)（次の説明参照）に含めた。

次に、19の項目と、それに属する用例数を挙げる。複数の項目にわたる用例もあるので、用例数の合計は210より多くなる。

I 主体による原因

- イ. 自分の境涯をふり返り総合的に身の不幸を自覚する 31例
ロ. 道ならぬ恋・ふさわしくない恋に踏みこむ 16例
ハ. 恋愛や結婚に於いて自分の身分の低さを自覚する 4例
ニ. 自分の病身やもののけの姿を自覚する 5例
ホ. 身近な人の死後も自分が生き続ける 4例

II 他者による原因

- ヘ. 恋の相手(男性)や夫が冷淡、愛情がさめる、浮気をする 25例
ト. 人の冷酷なしうち・感心しない言動に接する 19例
チ. 思いがけない男・好きでない男が言い寄る 14例
リ. 恋の相手(女性)が冷淡 16例
ヌ. 政治的失脚・社会的不遇 18例
ル. 妻の密通 12例
ヲ. 身近な人・愛する人が死ぬ 10例
ワ. 外聞が悪い、人のもの笑いになる 8例
カ. 身近な人・愛する人と心ならずも別れる 5例
ヨ. 人の病相・死相・もののけの姿に接する 6例
タ. 厳しい自然に接する 1例
レ. 人妻の密通事件一般 2例

III 主体・他者の両方による原因

- ソ. 総合的な世のうさを感じる、又具体的原因の指摘できない「うし」、慣用的用法 22例
ツ. 相手も自分も愛情がさめる 1例

(二)

次に、第一節で述べたA～Dの4グループ別に、原因がI・II・IIIいずれにあるかを表示してみる。

	I	II	III	計
A	45	11	1	57
B	7	25	3	35
C	3	37	23	63
D	0	55	0	55
計	55	128	27	210

「うし」という感情を惹きおこす原因は自分、他者に
関わらずあり、中でも他者にある場合の方が多いことを、
上の表によって確認しておきたい。主体自身が「うし」
の対象であるAグループでも、直接的原因は他者によ
ってもたらされることがあるのである。しかもAグループ
の半数以上が属する(イ)項目の根本的原因を探ると他者
にあることが多いから、「うし」の原因は他者によっても
たらされることが圧倒的に多いと言ってよい。従って、
小学館源氏物語(5)p.99 頭注三の

「『うし』『つらし』はともに、つらくいやな思いをす
る意であるが、前者は自分自身に原因があり、後者は、
相手もしくは他人に原因がある場合に用いる。」
という記述は正確ではない。この注に該当する「うし」
も含めて主体自身が対象となっている(又は主体自身が
対象、と想定できる)例が多いことは確かであるし、又
「対象」とは「主体が主観的に認識する『うし』の原因」
とも言えるから、この注の下線部分は

「前者は自分自身に原因があると認識した場合に用い」
の意と解釈した方が正確である。

結 び

第一節で私は「うし」を対象によって四つのグループ
に分類し、「うし」によって表される感情について考察
した。その結果、「うし」の用法は

1. 自分や、自分を含む世を対象とする(A・B・C)
2. 他者を対象とする(D)

の二通りがあるが、2の用法も1の用法の意味を保持し
つつ使われていることがわかった。

第二節で見られた男女による「うし」の対象の違いは

源氏物語の「うし」「うさ」の全用例を次に掲げる。

「主体」の欄の()は、他の登場人物から推量されていることを示す。

「対象による分類」「原因による分類」の欄の記号は、本文1p, 11p 参照。

当時における男女のものの感じ方の違いを表している
と思われるが、猶検討してみたい。

第三節では、「うし」と感ずる原因は他者にあるもの
が多く、又、自分にあるもの、自分と他者の両方にある
ものと、さまざまであることがわかった。

「うし」の本義が、自分のつらく悲しい嘆きの気持を
表すところにあり、しかも「うし」という感情の原因は
自分、他者いずれにあるかに関わらないとすれば、「う
し」とは、自己に生じたつらく悲しい感情を、感情の生
じた原因に結びつけることなく、自分自身に集中しよ
うとするものの考え方、感じ方を象徴する言葉なのではあ
るまいか。 (以上)

注1 清水好子「紫式部」岩波新書

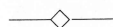
今井源衛「紫式部」吉川弘文館

中野幸一「紫式部とうし」国文学解釈と教材の研究 昭53年7月号

注2 ㊦「中空にうき宿世なれば」(柏木巻)

母が娘の宿世のことを言ったものである。母に
とって娘の宿世は他者ではあるが、ここは母が
自分を娘と一体化させているのだらうから、A
グループに入れた。

注3 引歌による表現を認定するにはいろいろな立場
があるが、ここでは小学館全集本の頭注に拠った。



本稿が成るにあたっては、学習院大学吉岡曠教授に数
々の御助言をいただきました。付記して厚く感謝の意を
表します。

通し 番号	巻 名	全集本 巻・頁	本 文	主 体	対 象 に よる分類	原 因 に よる分類
①	桐 壺	(1) 103	今までとまり侍るがいとうきを	桐壺更衣母	A	ホI
②		109	かくいまましき身の添ひたてまつらむも、いと人聞きう かるべし	桐壺更衣母	D	ワII
③	帚 木	142	ひたすらにうしとも思ひ離れぬ男、聞きつけて涙落とせば	女	D	へII
④		148	まことにうしなども思ひて絶えぬべき気色ならば	左 馬 頭	D	リII
⑤		150	手を折りてあひみしことを数ふればこれひとつやは君がう きふし	左 馬 頭	D	リII
⑥		150	うきふしを心ひとつに数へきてこや君が手を別るべきをり	指 喰 女	D	へII
⑦		158	さるうきことやあらむとも知らず	(夕 顔)	D	トII
⑧		177	かくおし立ち給へるを深く情なくうしと思ひ入りたるさま	空 蟬	D	チII
⑨		178	慰めがたくうしと思へれば	空 蟬	B	チII
⑩		178	いとかくうき身のほどの定まらぬありしなからの身にて	空 蟬	A	ハI

通し 番号	巻 名	全集本 巻・頁	本 文	主 体	対 象 に よる分類	原 因 に よる分類
⑪		180	身のうさを嘆くにあかで明るる夜はとりかさねてぞねもな かれける	空 蟬	A	ハ I
⑫	帚 木	187	とばかりものものたまはず、いたくうめきてうしと思したり	源 氏	B	リ II
⑬		187	数ならぬ伏屋に生ふる名のうさにあるにもあらず消ゆる帚木	空 蟬	A	ハ I
⑭	空 蟬	191	今宵なむはじめてうしと世を思ひ知りぬれば	源 氏	C	リ II
⑮		192	やがてつれなくてやみ給ひなましかばうからまし	空 蟬	B	ヘ II
⑯		202	いと深く憎みたまふべかめれば、身もうく思ひはてぬ	源 氏	A	リ II
⑰	夕 顔	220	絶えて思ほし忘れなんことも、いと言ふかひなくうかるべ きことに思ひて	空 蟬	D	ヘ II
⑱		230	つらきもうきもかたはらいたきことも、思ひ入れたるさま ならで	夕 顔	B	ソ III
⑲		233	前の世の契り知らる身のうさに行く末かねて頼みがたさよ	夕 顔	A	イ I
⑳		258	なほざりにこそ紛らはし給ふらめとなん、うきことに思し たりし	(夕 顔)	D	ヘ II
㉑		263	うしと思しはてにけるを、いとほしと思ふに	源 氏	B	リ II
㉒		264	空蟬の世はうきものと知りにしをまた言の葉にかかる命か	源 氏	C	リ II
㉓	若 紫	306	世語りに人や伝へたぐひなくうき身を醒めぬ夢になしても	藤 壺	A	ロ I
㉔		315	故姫君のいと情なくうきものに思ひ聞こえ給へりしに	紫 上 母	D	ト II
㉕	末摘花	379	心から、などかかう、うき世を見あつかふらむ	源 氏	C	ロ I
㉖	紅葉賀	391	宮の御気色も、ありしよりは、いとうきふしに思しおきて	藤 壺	B	ロ I
㉗		417	まことは、うしや世の中よ	源 氏	C	ワ II
㉘	花 宴	427	うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじとや 思ふ	朧 月 夜	A	ロ I
㉙	葵	(2) 18	影をのみみたらし川のつれなきに身のうきほどぞいとど知 らるる	六條御息所	A	ヘ II
㊱		20	かの御車の所争ひをまねび聞ゆる人ありければ、いといと ほしう、うしと思して	源 氏	D	ト II
㊲		25	御禊河の荒かりし瀬に、いとどよろづいとうく思し入れたり	六條御息所	B	ト II
㊳		28	袖ぬるる恋路とかつは知りながら下り立つ田子のみづから ぞうき	六條御息所	A	ロ I
㊴		29	身ひとつのうき嘆きよりほかに、人をあしかれなど思ふ心 もなけれど	六條御息所	A	ロヘ III
㊵		30	現のわが身ながらさるうとましきことを言ひつけらるる、 宿世のうきこと	六條御息所	A	ニ I
㊶		40	悲しきことに事を添へて、世の中をいとうきものに思しし みぬれば	源 氏	C	ヨ II
㊷		44	うしと思ひしみにし世もなべて厭はしうなりたまひて	源 氏	C	ヨ II
㊸		46	なほいと限りなき身のうさなりけり	六條御息所	A	ニ I
㊹		47	かく心より外に若々しきもの思ひをして、つひにうき名を さへ流しはてつべきこと	六條御息所	A	ロ I
㊺		68	世の中のいとうくおぼゆるほど過ぐしてなむ、人にも見え 奉るべき	源 氏	C	ヲ II
㊻	賢 木	75	まことにうしと思す事こそありけめと、知りはて給ひぬれば	(源 氏)	D	ヨ II
㊼		75	うき世を行き離れむと思すに	六條御息所	C	ロヘ III
㊽		94	見知り給はぬ世のうさに、立ちまふべくも思されず	源 氏	C	ト II

通し 番号	巻 名	全集本 巻・頁	本 文	主 体	対 象 に よる分類	原 因 に よる分類
43	賢 木	(2) 100	男は、うしつらしと思ひ聞え給ふこと限りなきに	源 氏	D	リⅡ
44		105	もの心細く、なぞや世に経ればうさこそまされと思し立つ には	源 氏	C	リⅡⅡ
45		106	かかること絶えずは、いとどしき世に、うき名さへ漏り出 でなむ	藤 壺	A	イⅠ
46		109	「うき人しもぞ」と思し出でらるおしあけ方の月影に	源 氏	D	リⅡ
47		121	ながらふる程はうけれどゆきめぐり今日はその世にあふ心 地して	藤 壺	B	ホヌトⅢ
48		125	おほかたのうきにつけてはいとへどもいつかこの世を背き はつべき	藤 壺	C	ホヌトⅢ
49		126	世のうさにたへず、かくなり給ひにたれば	(藤 壺)	C	ホヌトⅢ
50	須 磨	153	うきものと思ひ棄てつる世も、今はと住み離れなんことを 思すには	源 氏	C	ⅡⅡ
51		161	いぎたなき人は、見給へむにつけても、なかなかうき世の がれ難う思う給へられぬべければ	源 氏	C	ⅡⅡ
52		169	今はと世を思ひはつる程のうさつらさも、たぐひなきこと にこそ侍りけれ	源 氏	C	ⅡⅡ
53		170	うしと思しなすゆかり多うて	源 氏	D	トⅡ
54		172	別れしに悲しきことは尽きにしをまたぞこの世のうさはま される	源 氏	C	ⅡⅡ
55		173	うき世をば今ぞ別るとどまらむ名をばただすの神にまか せて	源 氏	C	ⅡⅡ
56		175	咲きてとく散るはうけれどゆく春は花の都を立ちかへりみよ	王 命 婦	D	カⅡ
57		183	かばかりうき世の人言なれど	藤 壺	C	ワⅡ
58		185	かく、うき世に罪をだに失はむと思せば、	源 氏	C	ⅡⅡ
59	須 磨	186	あはれに思ひ聞えし人を、ひとふしうしと思ひ聞えし心あ やまりに	源 氏	D	ヨⅡ
60		195	うしとのみひとへに物は思ほえて左右にもぬる袖かな	源 氏	C	ⅡⅡ
61	明 石	246	むつごとを語り合はせむ人もがなうき世の夢もなかばさむ やと	源 氏	C	ⅡⅡ
62		257	年経つる苫屋も荒れてうき波のかへるかたにや身をたぐへ まし	明 石 女 君	D	カⅡ
63		259	身のうきをもとにて、わりなきことなれど、うち棄て給へ る恨みのやる方なきに	明 石 女 君	A	ハⅠ
64	濤 標	271	さる騒ぎをさへひき出でて、わが名をばさらにも言はず、 人の御ためさへなど思し出づるに、いとうき御身なり	朧 月 夜	A	ロⅠ
65		278	御身近うも仕うまつり馴ればうき身も慰みなまし、と見奉る	明 石 乳 母	A	イⅠ
66		285	うきものはわが身にこそありけれ	明 石 乳 母	A	へⅡ
67		289	うき身からは同じ嘆かしさにこそ	花 散 里	A	イⅠ
68		289	女はうきに懲り給ひて、昔のやうにもあひしらへ聞え給は ず	朧 月 夜	B	ロⅠ
69		291	大后は、うきものは世なりけり、と思し嘆く	弘徽殿大后	C	ⅡⅡ
70		291	兵部卿の親王、年ごろの御心ばへのつらく思はずにて、た だ世の聞えをのみ思し憚り給ひし事を、大臣はうきものに 思しおきて	源 氏	D	トⅡ

通し 番号	巻 名	全集本 巻・頁	本 文	主 体	対 象 に よる分類	原 因 に よる分類
71		301	うき身をつみ侍るにも、女は思ひの外にて物思ひを添ふるものになむ侍りければ	六條御息所	A	イ I
72		309	うきものに思ひおかれ侍りにしをなん、世にいとほしく思ひ給ふる	(六條御息所)	D	へ II
73	蓬 生	315	竹の子の世のうき節を、時々につけてあつかひ聞え給ふに	紫 上	C	カ II
74		316	なべての世うく思し乱れし紛れに	源 氏	C	ヌ II
75		325	世のうき時は見えぬ山路をこそは尋ぬなれ	(末 摘 花)	C	ソ III
76		326	わが身はうくて、かく忘れたるにこそあれ	末 摘 花	A	イ I
77		322	年ごろの忍びがたき世のうきを過ぎ侍りつるに	末摘花の乳母子	C	ヌ II
78	関 屋	354	身ひとつのうきことにて嘆き明かし暮らす	空 蟬	A	ト II
79		354	うき宿世ある身にて、かく生きとまりて、はてはてはめづらしきことどもを聞き添ふるかなと、人知れず思ひ知りてうきめ見しそのをりよりも今日はまた過ぎにしかたにかへる涙か	空 蟬	A	イ I
80	絵 合	368		源 氏	A	ヌ II
81	松 風	402	うき世に帰り給へる心ざし浅からず	(明 石 尼)	C	ソ III
82	薄 雲	419	さまざまに思ひ乱るるに、身のうきこと限りなし	明 石 女 君	A	イ I
83		455	世の中を、あちきなくうし、と思ひ知る気色	明 石 女 君	C	へ II
84		456	いさりせし影忘れぬかがり火は身のうき舟やしたひ来にけむ	明 石 女 君	A	イ I
85		456	誰うきもの、とお返し恨み給ふ	(明石女君)	C	へ II
86	朝 顔	462	今日は老も忘れ、うき世の嘆きみなさりぬる心地なむ	女 五 宮	C	ソ III
87		470	「馴れゆくこそげにうきこと多かりけれ。」とばかりにて	紫 上	B	へ II
88		486	なき人を慕ふ心にまかせても影見ぬみつの瀬にやまどはむと思すぞうかりけるとや	源 氏	B	カ II
89	少 女	(3) 33	世はうきものにもありけるかな	内 大 臣	C	ヌ II
90		46	人の心こそうきものはあれ	大 宮	D	ト II
91		51	いでや、うかりける世かな	雲居雁乳母	C	チ II
92		51	いろいろに身のうきほどの知らるるはいかに染めける中の衣ぞ	雲 居 雁	A	イ I
93		61	年ごろ遊び馴れし所のみ思ひ出でらるることまされば、里さへうくおぼえ給ひつつ	夕 霧	D	カ II
94	玉 鬘	87	もの思し知るままに、世をいとうきものに思して、年三などし給ふ	玉 鬘	C	イ I
95		95	うきことに胸のみ騒ぐひびきにはひびきの灘もさはらざりけり	玉 鬘 乳 母	D	ト II
96	初 音	146	世のうき目見えぬ山路に思ひなずらへて	空蟬・末摘花	C	へ II
97	胡 蝶	179	まことの親の御あたりならましければ、おろかには見放ち給ふとも、かくざまのうきことはあらましや	玉 鬘	D	チ II
98		180	我にもあらぬさまして、いとうしと思いたれば	玉 鬘	B	チ II
99		183	かうやうの気色漏り出では、いみじう人笑はれに、うき名にもあるべきかな	玉 鬘	A	チ II
100	螢	187	かの監がうかりしまには、なずらふべきけはひならねど	玉 鬘	D	ト II
101		194	姫君は、かくさすがなる御気色を「わがみづからのうきぞかし。」	玉 鬘	A	チ II
102	野 分	269	おほかたに萩の葉すぐる風の音もうき身ひとつにしむ心ちして	明 石 女 君	A	イ I

通し 番号	巻 名	全集本 巻・頁	本 文	主 体	対 象 に よる分類	原 因 に よる分類
⑩③	真木柱	341	思はずにうき宿世なりけりと、思ひ入り給へるさまのたゆ みなきを	玉 鬘	A	チII
⑩④		352	うき身のゆかり軽々しきやうなる	鬚黒北方	A	ニI
⑩⑤		353	世の人にも似ぬ身のうきをなむ、宮にも思し嘆きて	鬚黒北方	A	ニI
⑩⑥		360	うき事を思ひ騒げばさまさまにくゆる煙ぞいとど立ち添ふ	鬚黒大将	D	トII
⑩⑦		384	身をうきものに思ひしみ給ひて、かやうのすさびごとをも あいなく思しければ	玉 鬘	A	イI
⑩⑧	梅 枝	415	しばしつらかりし御心をうしと思へば	夕 霧	D	トII
⑩⑨		417	常よりことに大臣の思ひ嘆き給へる御気色に恥しう、うき 身と思し沈めど	雲 居 雁	A	イI
⑪⑩		419	つれなきはうき世の常になりゆくを忘れぬ人や人にことなる	夕 霧	C	ソIII
⑪⑪		419	けしきばかりもかすめぬつれなきよ、と思ひ続け給ふはう けれど	雲 居 雁	B	へII
⑪⑫	藤裏葉	443	年ごろよろづに嘆き沈み、さまさまうき身と思ひ屈しつる 命も延べまほしう	明石女君	A	イI
⑪⑬	若菜上	(4) 28	さやうなることの世に漏り出でんこと、いとうきことなり	朱 雀 院	D	レII
⑪⑭	若菜下	154	母君もきこそひがみ給へれど、現心出でくる時は、口惜し くうき世と思ひ果て給ふ	鬚黒北方	C	へII
⑪⑮		218	いとうしと思ひ聞えて	柏 木	D	リII
⑪⑯		220	あけぐれの空にうき身は消えなん夢なりけりと見てもや むべく	女 三 宮	A	ロI
⑪⑰		229	「何かうき世に久しかるべき」とうち誦じ独りごちて	柏 木	C	ソIII
⑪⑱		244	人づてならずうき事を知る知る、ありしながら見奉らむよ	源 氏	D	ルII
⑪⑲		249	あやにくに、うきに紛れぬ恋しきの苦しく思さるれば	源 氏	D	ルII
⑫①		252	うしろめたき筋のことうきものに思し知りて	源 氏	D	レII
⑫②		258	けしからずうきこと言ひ出づるたぐひも聞ゆかし	朱 雀 院	D	ルII
⑫③	柏 木	281	いかなりぬるとだに御耳とどめさせ給はぬも、ことわり なれど、いとうくも侍るかな	柏 木	D	リII
⑫④		286	立ちそひて消えやしなましうき事を思ひ乱るる煙くらべに	女 三 宮	B	ロI
⑫⑤		292	我ながらもえ思ひ直すまじう、うき事のうちまじりぬべきを	源 氏	D	トI
⑫⑥		297	おとどの君、うしと思すかたも忘れて	源 氏	D	ルII
⑫⑦		320	いづ方にもよらず、中空にうき宿世なりければ	落葉宮母	A	イI
⑫⑧		321	御遺言のあはれなるになん、うきにもうれしき瀬はまじり 侍りける	落葉宮母	B	ヲII
⑫⑨		328	うき世の中を思ひ給へ沈む月日のつもるけちめにや	落葉宮母	C	ソIII
⑫⑩	横 笛	336	うき世にはあらぬところのゆかしくてそむく山路に思ひこ そ入れ	女 三 宮	C	ソIII
⑬①		339	うきふしも忘れずながらくれ竹のこは棄てがたきものにぞ ありける	源 氏	D	ルII
⑬②		339	このうきふしみな思し忘れぬべし	源 氏	D	ルII
⑬③		342	世のうきつまに、といふやうになむ見給ふる	(落葉宮)	C	ヲII
⑬④	鈴 虫	368	内にはうきを知り給ふ気色しるく	源 氏	D	ルII
⑬⑤		370	おほかたの秋をばうしと知りにしをふり棄てがたき鈴虫の声	女 三 宮	D	へII
⑬⑥	夕 霧	396	世を知りたる方の心安きやうに折たほのめかすめざまし う、げたたぐひなき身のうきなりやと思し続け給ふに	落 葉 宮	A	イI

通し 番号	巻 名	全集本 巻・頁	本 文	主 体	対 象 に よる分類	原 因 に よる分類
⑬⑥	夕 霧	(4) 396	うきみづからの罪を思ひ知るとても	落 葉 宮	A	イ I
⑬⑦		396	われのみやうき世を知れるためしにて濡れそふ袖の名をく たすべき	落 葉 宮	C	イ I
⑬⑧		401	うしと思すともいかがはせむ、と思す	(落葉宮母)	B	チ II
⑬⑨		406	いとうく口惜しと思すに、涙ほろほろとこぼれ給ひぬ	落 葉 宮 母	B	チ II
⑭④		409	かくまでもすすろに人に見ゆるやうはあらじかしと宿世う く思し屈して	落 葉 宮	A	チ II
⑭①		412	故督の君の御心ざまの思はずなりし時、いとうしと思ひし かど	落 葉 宮 母	B	へ II
⑭②		413	御身のうきままに、後れ聞えじと思せば、つと添ひ給へり	落 葉 宮	A	イ I
⑭③		420	このふしをことにうしとも思し驚くべき事しなければ	落 葉 宮	B	チ II
⑭④		445	世のうきにつけて厭ふはなかなか人わろきわざなり	(落 葉 宮)	C	ソ III
⑭⑤		462	人の聞き思はむこともよろづになのめならざりける身のう さをばさるものにて	落 葉 宮	A	イ I
⑭⑥		472	何ゆゑか世に数ならぬ身ひとつをうしとも思ひ悲しとも聞く	(内 大 臣)	D	ト II
⑭⑦		473	数ならば身に知られまし世のうさを人のためにも濡らす袖 かな	藤 典 侍	C	へ II
⑭⑧		474	人の世のうきをあはれと見しかども身にかへんとは思はざり しを	雲 居 雁	C	へ II
⑭⑨	御 法	498	夢ぞ名残りさへうかりける	夕 霧	D	ヲ II
⑮①		503	枯れ果つる野辺をうしとや亡き人の秋に心をとどめざりけん	(紫 上)	D	タ II
⑮②	幻	510	うき世にはゆき消えなと思ひつつおもひの外になほぞほ どふる	源 氏	C	ヲ II
⑮③		511	世のはかなくうきを知らすべく、仏などの掟て給へる身な るべし	源 氏	C	ソ III
⑮④	匂 宮	514	うき世をもえ背きやり給はず	源 氏	C	ヲ II
⑮⑤		(5) 18	かく思はずなりける事の乱れに必ずうしと思しなるふしあ りけむ	(女 三 宮)	B	ソ III
⑮⑥	竹 河	92	流れての頼めむなしき竹河に世はうきものと思ひ知りにき	薫	C	リ II
⑮⑦		100	なほ思ひそめてし心絶えず、うくもつらくも思ひつつ	藏 人 少 将	B	リ II
⑮⑧	橋 姫	109	深き御契りの二つなきばかりをうき世の慰めにて	八宮・北方	C	ス II
⑮⑨		115	いかでかく巢立ちけるぞと思ふにもうき水鳥の契りをぞ知る	大 君	A	イ I
⑮⑩		134	かつ知りながら、うきを知らず顔なるも世のさがと思う給 へ知るを	薫	B	リ II
⑮⑪	総 角	225	言ふかひなくうしと思ひて泣き給ふ御気色のいといとほし ければ	大 君	B	チ II
⑮⑫		229	鳥の音も聞こえぬ山と思ひしを世のうきことはたづね来に けり	大 君	C	チ II
⑮⑬		232	いみじく思ひのほかなる身のうさと泣き沈み給へる御さま ども	大君・中君	A	チ I
⑮⑭		246	うきもつらきも、かたがたに忘れ給ふまじくなん	薫	B	リ II
⑮⑮		278	いとどかかの方をうきものに思ひはてて	大 君	C	ツ III
⑮⑯		289	思ひのほかに見奉るにつけてさへ、身のうさを思ひ添ふる が、あぢきなくもあるかな	大 君	A	イ I
⑮⑰		290	さもこそはうき身どもにて、さるべき人にも後れ奉らめ	大君・中君	A	イ I

通し 番号	巻 名	全集本 巻・頁	本 文	主 体	対 象 に よる分類	原 因 に よる分類
167	総 角	(5) 316	すこしうきさまをだに見せ給はばなむ、思ひしますふしにもせむ	薫	D	ヨII
168		319	恐ろしげにうきことの、悲しさもさめぬべきふしをだに見つけさせ給へ	薫	D	ヨII
169		320	いとうき人の御ゆかりなり	中 君	D	へII
170		322	よろづの事うき身なりけりと、もののみつつましくて	中 君	A	イI
171	早 蕨	335	心細き世のうきもつらさもうち語らひあはせ聞えしにこそ	中君・大君	C	ソIII
172		347	つれづれの紛らはしにも、世のうき慰めにも	(大 君)	C	ソIII
173	宿 木	373	必ず人わらへにうき事出で来んものぞとは、思ふ思ふ過ぐしつる世ぞかし	中 君	B	ワII
174		373	なほいとうき身なめれば、つひには山住みに還るべきなめり	中 君	A	イI
175		387	世のうきよりはなど、人は言ひしをも	古歌の作者	C	ソIII
176		392	いとかく心にしみて世をうきものとも思はざりしに	中 君	C	へII
177		392	このふしの身のうき、はた、言はん方なく限りと覚ゆるわざなりけり	中 君	A	へII
178		414	ただ、世やはうきなどやうに思はせて	中 君	C	ソIII
179		421	世の中いところせく思ひなられて、なほいとうき身なりけりと	中 君	A	イI
180		424	思ひのほかにくかりける御心かな	匂 宮	D	ルII
181	東 屋	(6) 43	いにしへのうきも慰みはべる	中 将 君	B	へII
182		63	この君は、言はでうしと思はんこと、いと恥しげに心深きを	(薫)	B	ソIII
183		77	うき世にはあらぬところを求めても君が盛りを見るよしもがな	中 将 君	C	ソIII
184	浮 舟	135	この人にうしと思はれて、忘れ給ひなむ心細さはいと深うしみにたれば	(薫)	D	ルII
185		136	女は、今より添ひたる身のうきを嘆き加へて	浮 舟	A	ロI
186		149	かかるうきこと聞きつけて思ひうとみ給ひなむ世には	浮 舟	B	ロI
187		159	ながらへて人わらへにうきこともあらむは	浮 舟	B	ワII
188		167	よろづ思しあはするに、いとうし	薫	D	ルII
189		173	かくうきことあるためしは下衆の中などの中にだに多くやはあなる	浮 舟	B	ロI
190		176	ながらへば必ずうき事見えぬべき身の	浮 舟	B	ワII
191		184	うきさまに言ひなす人もあらむこそ、思ひやり恥しけれど	浮 舟	B	ワII
192		185	嘆きわび身をば棄つとも亡き影にうき名流さむことをこそ思へ	浮 舟	A	ロI
193		186	つひに聞きあはせ給はんこといとうかるべし	浮 舟	D	ワII
194	蜻 蛉	225	いみじくうき世に経とも、いかでか必ず深き谷をも求め出でまし	(浮 舟)	C	へII
195		225	いみじうき水の契りかな	薫	D	ヲII
196		226	われもまたうき古里を荒れはてばたれやどり木のかげをしのばむ	薫	D	ヲII
197		235	常なしとこころ世を見るうき身だに人の知るまで嘆きやはする	薫	A	ヲII
198		250	宮をも思ひきこえじ、女をもうしと思はじ	薫	D	ルII
199	手 習	285	いかにうきさまを、知らぬ人にあつかはれ見えつらむ	浮 舟	A	ニI

通し 番号	巻 名	全集本 巻・頁	本 文	主 体	対 象 に よる分類	原 因 に よる分類
200	手 習	(6) 291	われかくてうき世の中にめぐるとも誰かは知らむ月の都に	浮 舟	C	ソIII
201		300	世の中をうしとてぞ、さる所には隠れみけむかし	(浮 舟)	C	ソIII
202		301	移し植ゑて思ひ乱れぬをみなへしうき世をそむく草の庵に	妹 尼	C	ソIII
203		305	限りなくうき身なりけりと見果ててし命さへあさましう長くて	浮 舟	A	イ I
204		312	はかなくて世にふる川のうき瀬にはたづねも行かじふたもとの杉	浮 舟	B	イ I
205		316	うきものと思ひも知らで過ぐす身をもの思ふ人と人は知りけり	(浮 舟)	B	ソIII
206		318	ありしいろいろのうきことを思ひ乱れ	浮 舟	B	イ I
207		319	やうやう身のうさをも慰めつべききはめに	浮 舟	A	イ I
208		330	心こそうき世の岸を離るれど行くへも知らぬあまのうき木を	浮 舟	C	ソIII
209		355	かかる筋につけて、いと軽くうきものにのみ世に知られ給ひぬれば	明 石 中 宮	D	ト II
210		356	うきことを聞きつけたらんこそいみじかるべけれ	薫	D	ルII